

造瓦

口口接接
口口

番外書冊

漫筆雜考

			二〇七八	和書門
二八	六〇	八四		
冊	架	函	號	類

庫文閣内			
二二	二二	二二	和書
函	冊	架	
二	二	三	號類

内閣文庫	
番號	和 20784
冊數	28 (22)
函號	211 304

000000



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





佐尾卷才に十三

淺草文庫

日迅

の印丸く大ききなるは雄なりをりよ小きなる
 雌なり又印の内ふとまき方なきなりしは印親
 しくくは雄印はふとまき方ありくは雌印は
 なまき方ありまきと天地造化の始より精血妙用
 して積生一物自然と一定の理は男女と人々
 ゐれども托胎の時自定れども佛名変生男子の
 法まかんとして造化の工を欺き利を為はを悟

むしんせし

○中院通夜氷室の釈

をのふはあふ事なるをいふ月ひて消ぬ氷よ

○五辛 荆楚歳時記五辛盤、ワノ本州時珍が説を

按せしが 葱ヒト蒜ニク韭ニラ蓼タデ菘カウ佛

すの六辛、梵、徇、徒、大、蒜、芥、葱、韭、菘、興、渠、興

渠ハ我國ニキヤナ名之玄應カ音義ハ阿魏ナリト

又ト阿魏ハ艸ト木ニ種アリ由アリ又ハ芸草ト云ト或

寺ニ見ヘ侍ル古来定カナラザル故近年関東版忘

令ニモ奥渠知サレ由ヲ記シ玉ヘリナニ與文ニタレ者ト云

シカリ知サレキ草阿魏トルモヲナシト云クニル柳營ノ

有司豈是ヲ知サレベケヤ定カナラヌトテ天下令主

ハサレハ実ニ國家、昭典トスヘ侍ル 道家、五辛ハ

韭ニ芸草ト云ト葱ニ蒜ニ菘ニ蓼ニ蓮ニヤマタテ

○本朝文粹ノ都良香所述道場法師傳云法師者

尾浪阿音郡人也ト尾浪古ヨリ八郡ニテ阿音

郡ナシ愛知郡ノ誤リカ道場法師生地、村里何レ所

ト云テ不記法師生レテ靈蛇頸ヲ纏ヒ繞リテ首尾垂リ

テ後ニ並堯ヲト云ヘリ今愛知郡尾頭村アリ蓋兒ノ

生地カ又道場ハ南元真寺、僧ト云ト今尾頭村ニ元

真寺ノ旧跡ト尾浪ノ元真寺ハ南都寺号カリテ遠

ルニヤ今度寺地古瓦多と好事者礎トス何レ時ニヤ
ヲ斗三村ニ移シ今願真寺ト称シ本願寺ノ徒トハ
ナレリ廢地ニハ某師堂ニ殘レリ古佛破像多ク傳ヘ
此寺ノ源為朝所立ト為朝撮ハ古後村東泉寺ノ
近境ニアリ不審為朝ノ尾張ニ死セシコ乃朝臣加
シテ傳ゼル意ラニ
別ニ為朝ト云人アリニヤ

○戰場ニ螺ヲ吹ハ胡俗ナリ賢愚狂ナトニアリ宝螺ノ
称ハ素ヨリ淳屠氏ノ書ニ出タリ

○洛東淨土寺村ニ安西世徳山本中山ノ四家氏アリ
テ公課ナシ是ハ義政慈照院ニ移リ至ヒニ取進仕トス

裔也トカヤ世ニ云安西村ハ本安西氏ノ家ニ載レ種
ナリト云

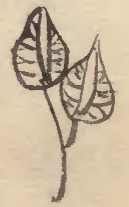
○源頼義朝臣東真ヲ征レ賊ノ耳ヲ切テ京師ニ携ヘ
来リ一地ニ哩ミ堂ヲ建等身弥勒ノ像ヲ安置セテ
今六條坊門西洞院西耳輪堂是ニ豊臣秀吉公
朝解ヲ攻韓人ノ耳ヲ取洛東方廣寺ノ境ニ哩ミ
耳塚ト呼シ六耳輪堂ノ例ヲ施シニ用艾一ク

○灸艾一灼ヲ一壯ト云東吳都印ウ三餘賢筆ト云若
用艾一灼謂之壯況在中カ曰壯人ヲ法其言若干
壯人當依此數老幼羸弱量リ咸ク下スリ今庸醫

人ヲシテ仕盛ナ 綱

○賀茂祭ノ葵桂両程をもちつゝと稱せり

葵



此の本にてもん母のあひだ
葵ノ人々知れしつゝを知らず

○信長諸國の弘治法廣く一極六乃小造りし其の

柳橋を極む時一田畑の費多し時の人為まよ

世にぐら極楽人の鬼牙の濁酒をりしり

○法華宗追部 院宣案

被院宣称近日有一類之僧徒為諸宗讎敵禁誡
之趣嚴制先畢而無憚憲章不怨 勅命在居
洛陽結黨於道場引率弟子同明妄称法華

○侍者号之自宗飽破天台之所說月氏之教相豈如
斯乎雖似展轉隨喜之切德忽犯誹謗正法之罪
障以外道之行爰偏表邪惡按本朝之比附爭
道科坐哉為國為法不可不禁 宜御廳衛追
部京都寺院宣如斯

仍執達如件

正慶三季
三月八日

權中納言定資奉

謹上中御門中納言

別當殿

別當宣

法華宗門事

任被仰未之旨被一類僧徒早可被追却洛陽之旨
別當殿仰所候也

仍執達如件

三月十一日

前土佐守榮業春

謹上高倉博士大吏判官殿

○家細公墓誌 人見友元制

寬永十八年辛巳八月三日降誕

征夷大將軍從一位右大臣

延宝八庚申五月八日薨

嚴有院殿贈正一位大相國公

○御位記

從一位源家細

右可贈正一位

中務威振万邦化益四海勇智安世武德直今宜
道暢終之禮式兼贈爵之恩可依前件主者
施行

延宝八年庚申五月廿一日

中務卿 關

正四位下行中務太輔 臣源朝臣資冬宣

正四位下中務少輔 臣藤原朝臣祐宣奉行

○尾陽中背の乃野氏或ハ源氏又ハ友房寺名家
 譜汝未む按さく春月井那水野村仁水地
 正照の家右系書りも望王の三田法も府將軍
 平良兼の子武彦も公雅の裔之治美に年四月
 の下知状の身代への下知状多し中より此を公
 義の時も氏公水野平七は觸りし又も師由役
 の時由義獨ふ所の小文ハ水野平七は也一も後此
 致取意永十九年の春佑中も在り其口宣今想
 之傳中もハ意永十九年十月廿日平ノ上水野村感德
 寺ニ葬一義雲院仁峯宗智居士と号せし亦是道

山内郡志談御司職成八條院より補一楊のり状
 等教通る水野の唐流ハ志終氏之り地代ハ地
 ハ上水野村の内一色と地村ノ三三
 町北方の道乃野久次郎
 織田の府ハは一色貫文の地を領せし府死流の後
 穿入とも成化傳中も今正照迄八代今我府下ハ
 仕へし御家状記中知多の乃野ハ皆一流細此共
 家系ハ夫ハ源氏と稱
 ○系也ハ諱を記せし知りたしハも友房表の後改め
 者ハ其の名を記すハ一近清殿也といふ

良嗣改忠嗣

諸家傳

物記書に又地トノ昇殿を廳々其家にて始ハト卿リ
進ルト人ハ主時の名を奉り室町家にていり

高氏改尊氏

口上

又大臣公卿カモリノ家の人共友の乃名を改むるを
後の名を奉り

義教元義宣

口上

義教初ハ信形三十六の時東駿一叙爵の時陳旌の
宣下あり時義宣と稱し永享元年三月は將軍
宣下の時一義教と改りけり也後の名を奉り
義教元義成

口上

義成の名ハ文安三年沖名字定の時辰義成
沸れ一諱トシト辛禄二年從一位の後改
改りけり一曾の例をうけて奉り地ト及ハ武士
の如きハ決ク是ハ托ルハ不レ及トシトト其中ハ
家成也一又ハ絶ク久クキ友位ハ任叙ありハ
其時の名を奉り改某ト注スト今ハ系譜の法乱
きて有職の人スク知ルをわひテ也トあり

○堂上家兼友多シト云々其中重キ以テ稱セト
もト小納言細長初ニ大内元文章初ニ改兼也リ
舟橋式初ハ備尚質初ニ明徳初ニ也兼也リ

けは武家、公方家御連枝原の尾張紀伊
水戸の麻呂公卿といへ唯受領八省管の友とあり
以て松平如實も参議 位三位 松平薩摩も 右衛門
或 或少将侍従又昇進ありても右のといへ
公方家次第は形々の風俗あり見張非と
とあり抱いたる事、心事も其時の風俗あり
右張非すも其時代を考へ事せされ謀りと
あり事多し心ゆるべきあり

○小野小梅は天文年中の友女に有故く三冊幅紙一
紙あり其位り未だ今も小野谷と小梅梅は

三浦海忠保房は嫁一男子二人を生たし男三
浦勘由保清次は小野修理免時房と稱す

○尾張の國は天香若峯の齋宮造とかり左は神
の事ありて其の社多し三河を以て數河の宇摩志
摩治命の後裔必造とあり何彼社の属の如き
の神社あり

○尾張國造小止與命 尾張氏祖千代電上神社に祭り 三河
俗は源を文の宮と云ふなり 遠江國造卯夜美命 物部代後
河内國造片堅石命 物部代

○尾張氏と物部氏より尾張の神を大祖と饒速日

○ 是はれ尾張三河等には其のあはれなり昔の
小造の支流

○ 延宝六年戊午九月十日昔國勝三郎信康より百年の
沛を忘 柳宮を品二候の青龍と白澤と
下りて一國必死を院寺願ふともは時中後附之
十石の中ま中一は寺信康より母集山度香人
の場

○ 宝永七年琉球の王子室永の御也 時十月二十日午後
燕氏彈亭の死を王子令て是と葬せしむ石碑
と彫り建其表曰如丸 碑高二尺五寸四方
剝毀石高六寸

琉球 琉球姓中西筑登之墓

其表云 燕姓中西筑登之者琉球国中山王使美里王子
臣也從美里王子往江都時宝永七年庚寅十月
二日因病死遠列濱松驛行年四十埋葬於西見
寺也同国宮人泣血誌

○ 執事の祠女及び市井の人死を北山とて根山依
たんふ山の北園は葬ひし中よ其兒の死骸を六兒
前のは埋むま兒前六執事ふ下の二神ころの時
誤りけがすも兒前六の石は依りかゝといふも供
の葬地は今の通り所の東方よま又神を敬死めり埋む

地

○澤觀音堂ハ元ノ坐の中成東北ノ山此山は觀音今
左ノ傍地ありしが一旦荒廢もろ名所のト云
府の岡高尾春減田志を致大ノ地ハ宮寺ト
政秀寺ハ天和尚を請テ開祖トシ其像七體者
張安並セリ其中ハ觀音の像ハ觀音堂元五室の古
法ヲ集濟造リタルト云

○吳鬼志曰何天者漢人也有一女容而美年死葬明日
見其塚畫成菊卷ト故名菊花女亦名女郎花唐共
菊の一名を女郎卷ト呼我玉のともありト云

○字訓の

扇梢扇の 抽幸ひき 維持保よま 瓶瓶小サクロモセハ

壺瓶の付 麿口大きく頼ナキヲ云 壺瓶のフクク 壘口小サク

盟大子口小く頭長 礫石ノクホキ 碓クラウス 臼ウチ

木龍石木ニテ作ル 泥龍石土ニテ塗ラタメ 磨子イロニス 運

鑪カタテヨコニ目ヲ 錫コトニカリ目ヲ 散書物 竹食外類 書

套中 牙籤象牙ノ小筒 髮類髪 髮ツツ 鼻ホウ

倭俗詩文題、字つゝひ得る

○寛永十八年柳屋家の若君始て柳宮系の時余
まで酒井齋はもとて三家の若君供のものなり

一は死水のも家へおぼろめりて我致公位回几柄
 云の職にて主位の人ハ僕卿の礼と祀る未も例を
 夕もけるふめと忠勝云信いれあさよ祀まといし
 大樹ハ氏の長老且大臣其ゆきおれが信の礼と
 りと公をせりて曰又をいり我ハ大相公の事と
 忠勝伏して其通りて言まて 台令は三つ山王社
 豫素まで 若君成女把言定りて 命意
 ぬふとぞ



○月影入山瑞もつらうさるぬ光るをえりてまふ
長明り方丈托の終はけりて汝うくを長明り神息入
るゆり是は源重廣の歌新初撰十歌女の初なる

○佛經は女人自沸うる湯獲よ入く骨肉を熟離其
鬢と取食ひし支とてり賢名花押の抱女自才と
忘八の家よ入臨を敷て作令する若是歌

○按家法花名家羽林家代々も家の外に昇殿
の人と帝王かともせりふ時其信昇殿をふるよ此と
一度地下にどうく又初して昇殿せしめあふ

○釈氏六地蔵と申す其種子三摩耶形等理軌の古

説とて頌しりて接するよ六地蔵を以て六は元
これ地蔵の上の使者としてのみさる所の像

船摩の使者 此獄持宝童子 鐵鬼 大力使者 畜生
文慈天女 修羅 宝秀天女人道 攝天使者 天道

右金剛智ノ後軌のりたり

○地蔵の密号悲願金剛或悲愍金剛

○三手觀音ハ二十七面也十臂 或ハ十二臂ト云ニ臂ハ手
身ノ手是ヲ除テハ十臂

本身北面一頂上弥陀佛面一左右前後三四面
十一面笑ハ十二面

上ノ佛面ハ是果下菩薩面ハ因果一ハ七十一面

塗提觀音八後軌三兩臂四臂八臂十臂 臂十

八臂三十二臂八十四臂等吳說あり 金剛勢

五八二十二面一百八臂 一説面二十六
菩薩面十八

○室永七年^{庚寅}十月十日

新帝御即位御寮震殿

内辨 九條左大臣輔實公

外辨 大炊御門大納言純音卿

三條中納言公統卿

坊城中納言佐清卿

冷泉宰相為綱卿

廣橋宰相兼藤口

滋野井宰相中將公澄

左 竹屋左衛門佐光兼

東坊城女納言資長

右 油小路宰相隆典

竹内淳心大納言惟永

唐橋侍從在康

典儀 高辻女納言總長

大將代左 池尻右兵衛佐英條

右 土市門左部女補泰連

次將 押小路左中將実岑

左 川鱒左中將実詮

藪左中將嗣義

山本右中將実仲

右 花園右中將実仲

橋井右中將氏教

攝政大政大臣家熙公

外畧之於東都三家及諸大名老成謀國而居

○同八年辛卯正月元日天皇御元服

同辛卯月二十五日甲申改元正徳元年

尚書大禹謨曰正徳利用厚生惟和高辻大内亮 總長抄古物文

改元定公卿

二條右大臣綱平公 九條右大將師孝卿

三條大納言公統卿 冷泉中納言為相卿

久我中納言惟通卿 藤原中納言隆長卿

六條宰相有友卿 野宮宰相定基卿

万里小路宰相尚房卿

○月朝日園東領岩改元於諸國諸家也 此處之

○廣弘明教卷八陣部征陽八陣部益別八陣部九

曰廣有之益別孔明異傳卷六考考(名)下

○尾列津嶋社吳説 何人の作らざりしや成るべし或人の家より書き

本社三所

力一素戔嗚尊 力二大安南智神

力三小男子神 スリナヒコ

別社一所

憶感社 赤家守ノ神祭神事代主命及痘疹之神云

本社初中島郡鎮座号大神神社云

孝灵天皇御宇降臨欽明天皇元年鎮座

初嵯峨天皇弘仁九年天下疫疾流行ス仍差

勅使奉幣赤荏院天慶六年宮号村上帝

天徳三年造宮一修院正暦五年天下疫疾

流行ス勅以中嶋郡大神社移建海部郡

津嶋 本社四十余座 神職氏亦移在津嶋同脚

号長徳元年勅号津嶋天王太神宮使

奉官幣云畧之

け託興天喜乙未年正月二日の字より

○右の記可疑の二より三所中力二力三今の社

況及京師祇園の神傳と大よ異し七且大安南 オホナナ

智小男子の文字右より左より別社憶感社より

ツカシと傳訓セリ先私達の傳説之或曰ツカシ云ハ思

寒中七時度の神は其の如く又一災をど一憶感神
 社津島の社は其の如く及是をりて家守の祠する
 るを謂ふ一相森岳由成信の地をりて初斗改大と
 とりりしは説は遠の事やと記すよふ附
 會之考矣天王の所を降降のみ欽明天皇元年流
 の説授ありと也但今社家の傳ゆも
 欽明帝の所を流降と云弘仁九年流度小
 史小載せりる也按まるとせは流布す方心經秘傳乃
 跋詔を弘法大師の作のとい傳れは後人の杜撰なる
 ののりりし被跋小弘仁九年大疫とま友是と云て
 津島を帝の元とせしと云類聚書史百七十三卷
 弘仁九年正月天下大

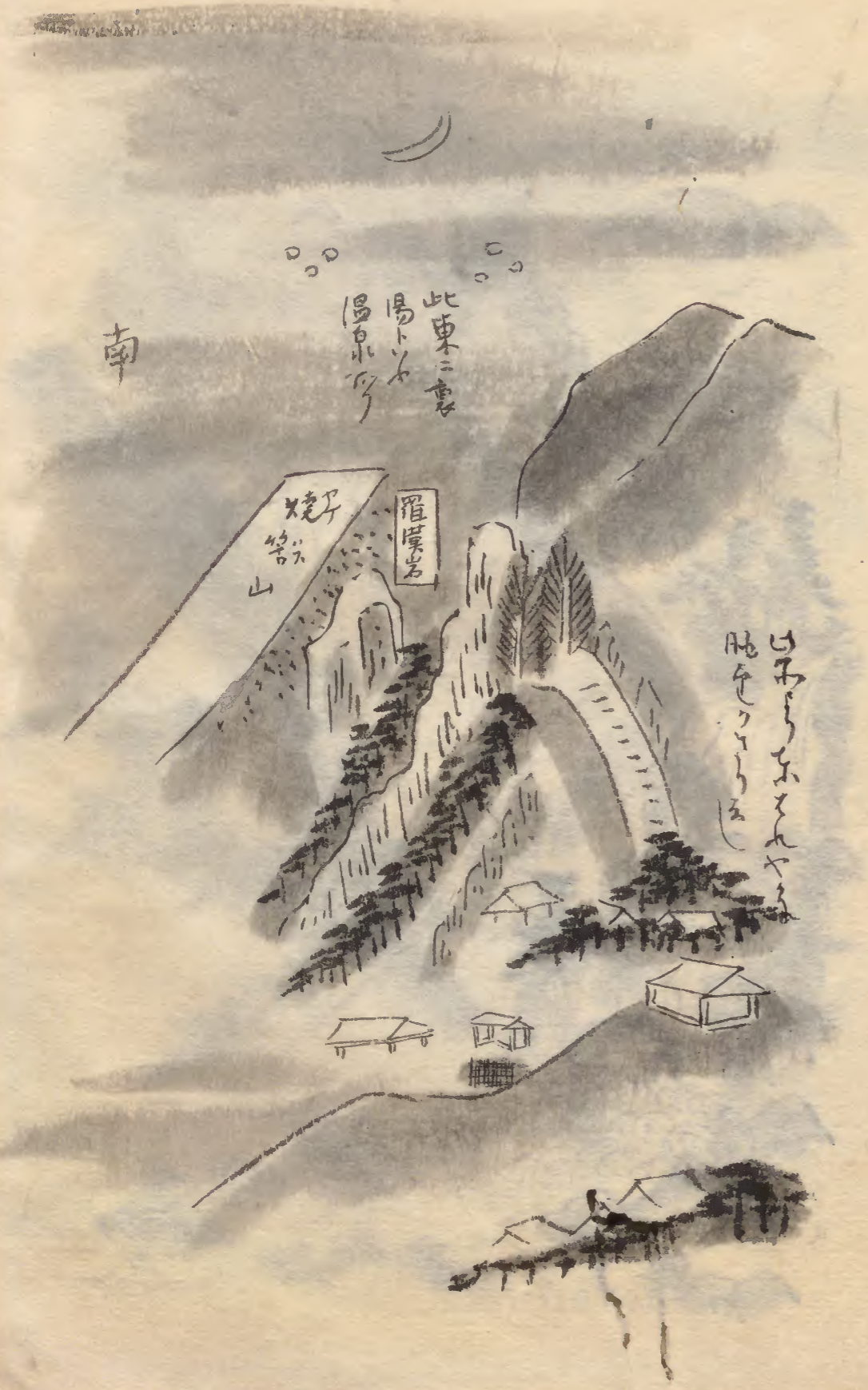
度死亡に津島度死亡に津島 天皇は天祖の官号造言はしよ下を帳に
 天皇のままを本體に津島社と天皇のままを本體に津島社と 正曆五年大神神社依福
 祭といふ自次湯記をえし大神の社は今猶中務那
 勢田庄之御流池村にあり社一旦廢の時中祀を
 一宮の女殿に納めし

揚する小中務那於保村に天王祠有り是其式の
 神名帳小中に是流も大神神社と誤りませり也
 八太神社りとも神社之御小中世多しと云ふの
 和別ちりきりたりと云てませり 度會地昌
 こい流ありし所の也不知若くは神と天王と云ふと
 是は其の社の根幹に附ませりる也一且太神社
 も又半は天王といふは其の祖神之中務那三宅村小

牛久天王の四墟あり今この村の神人等正月津禰
に往て神供を執せ蓋し三宅村より下浦に移り
祭らしむ右の檀りあり 今社家名を尋て詳て 長徳
の初号天王大神宮と稱めふと云ふ事一天王と
度神牛久天王のもふて元弘絶に於たり大徳と
の号をせみふに諸社は田ゆかりし号を稱する
又伊勢の宮等の所ありし時呼を稱すの
事延喜の事ふ違ふ事奥平の天皇し未の事
又後人の所すその文事後冷泉院の時の文法り
ありたりの事津附寺社の縁記より事一宅これあり

と云せりや

○海内奇觀の事ありて一徳境餘地を述せま
又山門の奥京の造化の事ある事は王侯と下と
恣いんぬの事ありて一とされ又自縁ふゆりて
とくんばりてありぬ事ありぬ事の名區奇觀
に里ふ心ありたりと云ふ事又一旦と云ふ事
く思ひ入てて観衆人々もまれありたり地
系相をえり唯真時時心をおく事自をうりて
よのこいひに事をも歴てよのふわれその事
ありし事ありし事ありて事ありて



南

此東ニ雲
馬ト云
湯泉ナリ

焼山

雁渡

ひまわりふとやま
地をうらやま

湯子の家
湯子(う)七(しち)の
湯子(う)の(う)つ(う)
竹(たけ)の(たけ)

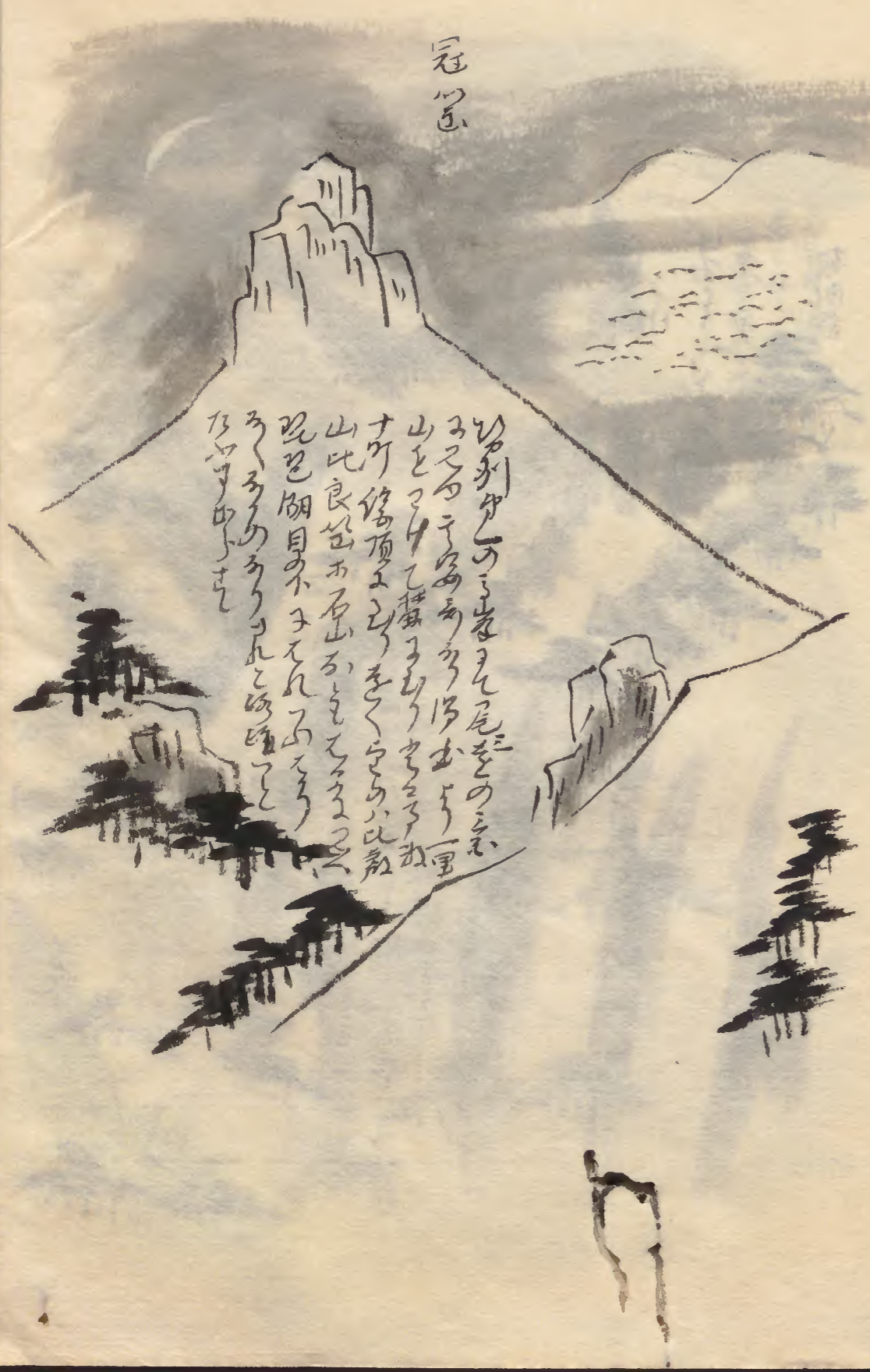
天の思(あまのし)や
こゝろ(こゝろ)や
ま(ま)を(を)
ま(ま)を(を)



湯子

湯子(う)を(を)
湯子(う)を(を)

冠山



此山は...
山とてけし...
山比良山...
此山は...
此山は...

比叡山



比叡山...
此山は...
此山は...

比叡山...
此山は...



木曾
御嶽
真三山

知多海

夕日し海を
舟をたてし
舟のまを

尾城

桑名
城

桑名谷の山

桑名山
と山

しん
く
る



観
明
石

しん
く
る

舟のまを
しんく
る

桑名
山

桑名

北

ひろしの庵
とくしき
光泉

菩提山

吾師のまはるるのまはるる
若くはまはるるまはるる
のまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる

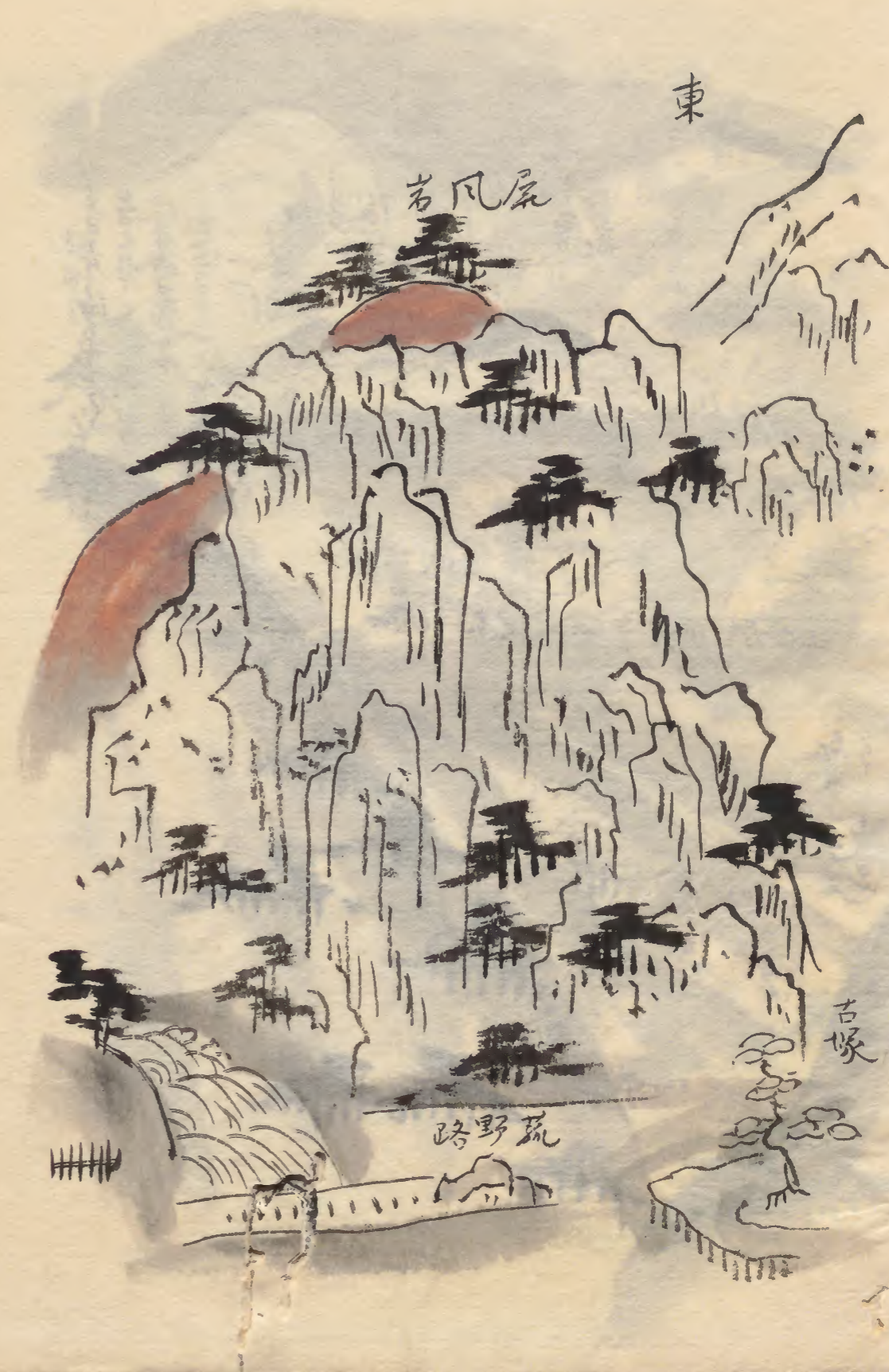


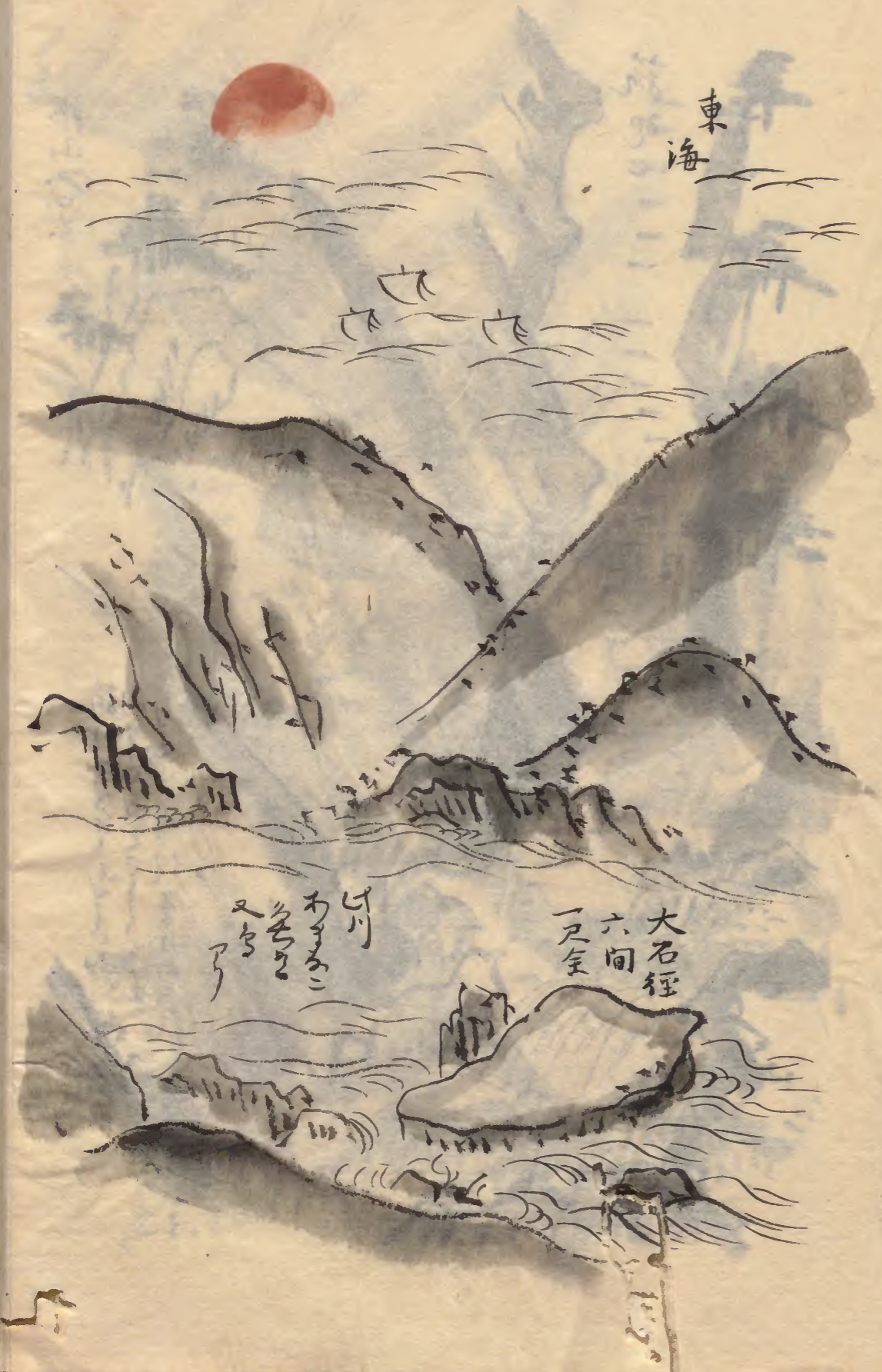
東

岩風庵

古塚

路野路

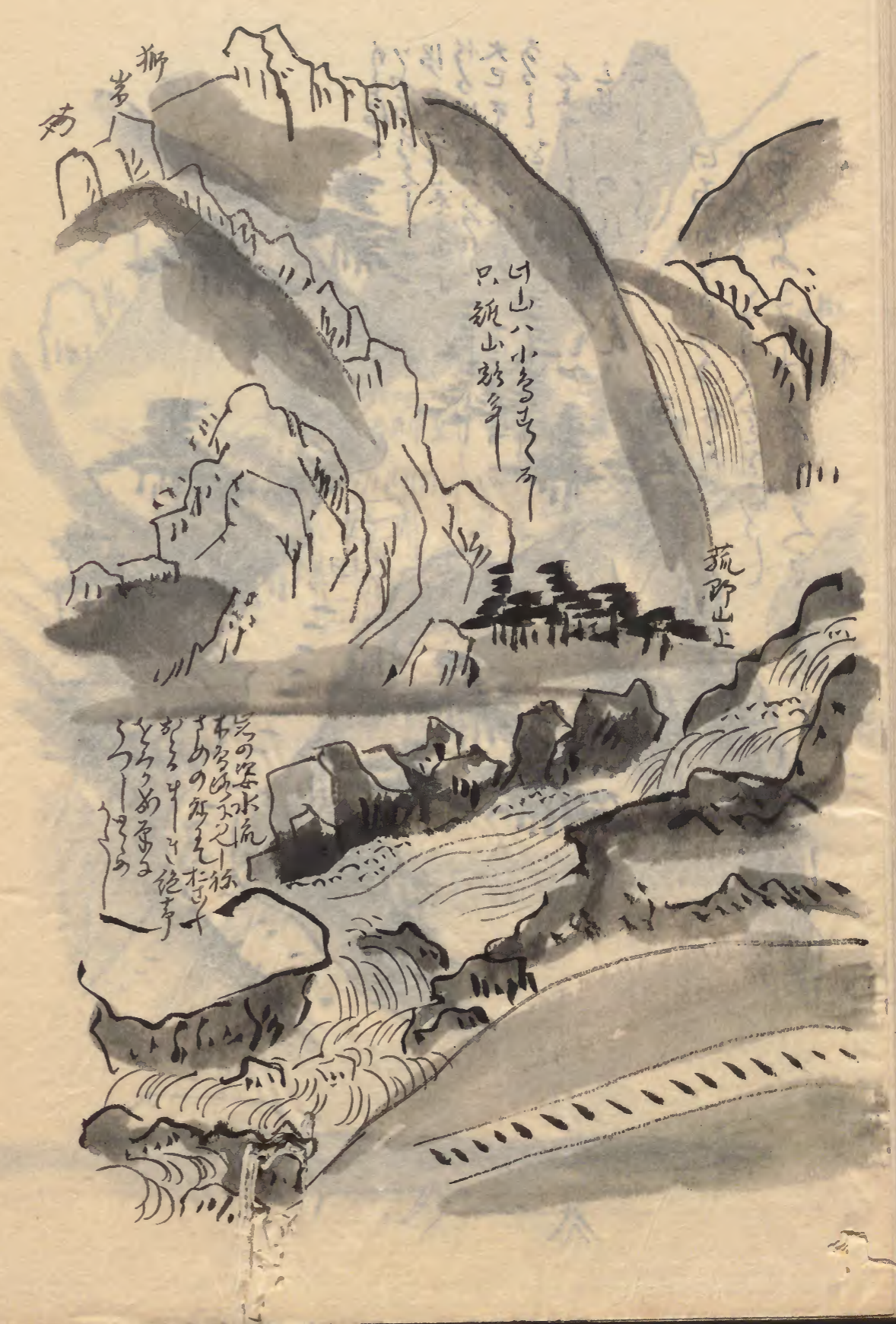




東海

げ川
あまみ
なま
又

大石徑
六間
一尺全



新
岩
南

げ山ハ小多き
只瓶山終年

荒野山上

岩の堅水流
石の隙に
水は流る
るるるる
るるるる
るるるる
るるるる

其成して祀るは又血脈貫通の人ふりしを
勅令をきりて理以て祭る時感念量康のん
やむ衆と皆今天子の史もいり大樹の列
玉の君其衆人の後を極く他成して遠徳を施
しむ時其衆祖先の靈をまつるはさる理
り中かまや又天地陰陽のあり万古成衆人
ありて彼の乃理よりえれ神鬼我と申理感念
の物々の隔りいんや又同今世諸社の神と古衆の
身は是上の隔りいんや申曰往古りが申
長に祭祀ふりて亦社に幣帛を自らはたし祀者

と兼て祭友にほふれ諸社の山川の事祀
の社に其女衆の女人の長を祀又社小現を
祠に事た人女帯成り其衆衆天地の神に
ひ下里の長を祀あつるはさる理
りいん衆共衆ふ入社をいれ已う衆か
大概みどりかかりいん衆共衆ふ入社をいれ
神祠の事いん衆共衆ふ入社をいれ
○耕雲口傳一冊の南禅寺禪栖院の耕雲魏公の
可述あり文安戊辰の
奥まじんゆ倭歌の口傳を記せり
揚子りよ魏公の巷山院衆中て南の補作の

賢臣正二位大納言近衛大納言友長親々の法名

△師信後一位 師賢大納言 家賢中納言 長親在太

い弟了き弁仙とて信濃中書王新葉集撰の

事をも委附の命を請ふれ又橘頭倭歌集

の撰者なり新後拾遺新統古今のお集り

明魏法師と其名をうけ侍り北朝の撰集なり

ゆへうけは倭歌の支那よりありしものなりは忠義

まのやうふして後赤山院御北選の後終り他の

人へは名もあつてさうく塵世をのり花扇

の辰は信のま水漂酒の身とありかひり

まのりさし匹如ありし初南をよはの時喜門

院周防のふ女房を福り一男子を生け周防の天

野傳中も行政の女ありし行政外孫をよりて後

二女宮内中備重貞とて南朝に仕へてまをより

應永六年大内政親の泉如ふて戦死す

魏公晩年を勅奠ふすまのり信をれり云文

禪師南帝の皇子の御名 秋葉の城と天野家

一親とまのりりまをよりて戦死す

三毛の綱とまをよりて信をれり人のつら綱は

けふも彼山寺の縁をれりて

○漢の中常侍良賀、位大長秋より、陽嘉中、詔て人を奉り、此は賀、独り、薦者あり、し、は、帝も、其、友、を、同、吏、り、賀、討、つ、曰、臣、草、茅、が、か、又、掖、に、去、り、膏、て、士、お、り、更、接、を、以、人、を、去、る、所、を、若、南、執、景、監、小、因、て、え、い、れ、を、識、者、其、不、終、を、去、れ、り、今、臣、を、奉、り、人、の、言、を、以、り、も、是、人、を、辱、り、り、し、固、辞、せ、し、嗚、呼、後、世、の、同、臣、妾、小、已、り、さ、ぬ、の、人、を、羞、り、或、い、已、し、西、附、一、賭、を、以、て、更、る、小、人、を、の、も、接、奉、り、り、改、り、由、一、所、り、り、め、お、き、と、素、業、一、を、去、る、を、必、然、り、り、賀、り、飛、人、一、と、よ、氏、大、学、行、民、よ、り、り、

○紫宸殿の湯、市、成、橋、橋、名、石、の、迎、清、の、名、を、呼、由、今、人、や、も、し、す、ま、い、な、名、を、得、り、と、云、今、も、由、雅、集、後、出、た、屋、た、大、將、に、時、任、の、時、市、翁、言、る、兼、流、て、得、り、れ、

時、より、ぬ、君、り、ま、い、や、橋、の、彩、も、橋、は、行、く、人、ら、ん、と、伝、せ、り、れ、一、た、近、府、の、橋、と、死、一、竹、の、ご、よ、し

○尾濤風去、死、残、編、は、天、野、里、上、野、天、野、川、去年、夏、如、二、麻

か、い、あり、里、中、橋、つ、の、奈、下、よ、り、一、川、の、噴、統、漢、の、歌、よ、死、せ、り、是、故、編、を、得、り、家、を、一、か、る、べ、く、今、流、別、丹、城、寺、村、の、北、一、里、余、の、地、は、天、野、村、の、り、毛、の、名、故、り、り、や、一、尾、濤、風、の、羽、雲、那、之、豊、臣、家、の、時、よ、り、受、流、は、隸、す、



○或軍家若流とて人よ山上の城地なるを修るを中一
 としりて松を敷田大抱母子上の陣説ゆて自為
 一試した事し山に遊をなしたに京北愛宕山の山見
 山上をてある又山信等ありぬるを多く修るを
 八宮を集の羅刹の元其まろ平生し削て松が
 訣まか今軍者のいふおは勝れり万其事実を志
 らむ傳のまふ語まじもをあるまに遠山も多
 別成るすよゆゆ

○或問家小神社の参礼と稱する人多くは故樂雜藝
 と爲し奇觀と傳ふ異邦のまじりたるま云く漢の

遊衣冠のめき見う但一後世号の淫祀のめき一
○問吳風也何云明朝吳の王禘登吳社禘祀也我
玉祭りの仕觀に亦一きやう一えゆそ君たのり一里
社の役ハ年穀を初り災復を極ふ災周ハ冷く
太平ハ樂む見古の社會かり吳風淫靡や一と
祀成すハ怪を為む人道を怪んして鬼神をま
と醫業成捨巫覡を崇め宗廟を毀り淫祠を建
し祖神を黜け野苐をまじむ淫弊下一春夏の更
安んじて神降し云云^{發汗逐末七賴不逞の徒}
事^{シテ}を法皇一市井の禮成礼一禘ねの身^{シテ}を感^スを

○後世の士自肯耆耄の老若轉ハ義堂の文達
罷虎の容知顔^{シテ}罪のせり心^{シテ}成^ス一志を棄
て^テ声^ヲを移^シ也を動^スは^シり^テ今^ハ成^ル由^リの^ニ
委^テる^ニの^ニに^テ轉^シて^ハ自^ラ戯^シを^シ羅^列一威^儀雜^遷
を^シ儲^蓄の^心を^シ路^ヲ實^運の^行を^シ滋^シ一象^圖の^風は
奢^淫の^術を^シ決^シて^ハ三^戸の^防を^シ決^シ一に^ハ民^の業^を廢^ス
嗟^ハ半^是社^の流^レて^ハ禍^をを^シす^ルあり^テ昔^ハ郭^代公^を
戮^シて^ハ鳥^氏の^妖を^シ西^門豹^を淫^成沉^めて^ハ河^伯の^害を^シ
今^の氏^ハ小^長れ^ル者^ハ見^ルの^中ハ^ハか^も見^ル所^謂魯^人獵^較
一孔子^ハ示^獵較^する^中ハ^ハ吳^の俗^淫祀^多ク^テ鬼^神

は感叶中中、松本會、極將會、開王會、觀音會、ホリ
具まじりま、五方賢聖會、これ、八洲の、文龍、神
成、修、年の、宿、り、ま、式、り、り、か、ん、ま、境、は、その、祭
の、ち、を、り、ひ、會、首、は、その、祭、成、生、す、る、人、を、い、ふ、と、成
其、ま、ま、集、も、留、人、は、令、教、を、損、し、て、宗、勝、を、う、り、瑞、興
と、申、娘、示、成、信、ひ、弟、の、節、令、根、神、統、を、い、て、ま、會
首、の、衆、初、り、先、ら、ら、と、教、月、經、官、を、初、り、及、ひ、衣、食
成、朝、一、た、ま、集、會、は、偏、門、曲、弓、一、初、り、任、の、者、と、各
是、を、助、學、是、を、助、ま、し、り、會、の、経、行、ま、る、お、通、備
廣、陌、は、玆、定、を、も、り、積、段、を、積、ひ、者、核、を、つ、り、ぬ、紐

令、淨、香、ま、ま、と、神、像、門、を、五、れ、は、士、女、羅、能、ま、ま、是
成、接、會、と、ま、家、ま、ま、ん、ま、ま、を、う、ま、り、神、典、の、り、を、の、門、成、也
る、あ、り、ま、ま、折、劣、一、七、害、を、招、く、威、屬、ま、ま、の、こ、り、
あ、り、面、の、こ、り、集、り、和、妝、日、は、映、ま、ま、留、る、は、列、慈、法
具、于、令、一、揮、ま、ま、留、る、は、茶、杯、腕、要、の、こ、り、是、を、者、ま、ま、
了、け、皆、家、ま、ま、を、か、ん、ま、ま、の、め、り、の、あ、り、ま、ま、の、こ、り、ま、ま、會、り、必、手、搏、の、ま、教、十、字、布、近
ま、九、豪、衆、の、阻、折、暴、市、の、侵、陵、悉、く、是、北、平、り
ま、て、扇、務、軍、雄、碑、圍、益、較、り、次、旁、觀、の、人、市、を、罷、の
康、を、掩、く、懼、之、是、成、寺、會、と、い、ふ、け、り、の、ま、ま、を、用、ま、ま、の、ま、ま、は、似、ま、ま、の、こ、り、
入、會、の、人、は、衣、履、成、ま、ま、の、人、也、男、女、み、る、か、ら、あ、を、解、

その物を物云と云又袍烏帽の袴袴を載て香炉を掛

或ハ磬を收手徑を流し地盤をより其をを云と云衣玉系
三十五夜

この節を考ゆ他家玉の袴の如くもそのりては雜戲

ニ其虚丘赤壁水晶宮三顧草庐等ハ故より作也

て仕支を更つぬ是曲ハ池楚霸
王單カ命ノ等雜劇則

神鬼則觀世音ニ帝神
漢天師ノロイ

人物則伍子胥源丈人
李太白ノルイ是等ハ本偶人を作り後をより

技術則傀儡竿木走索の頂我まよふりやうり
りよりさつる演りやう枝葉ををるは中ノ廣東

獅子全日態及につらぬ人毛をわがうて舞

獅子全日態及につらぬ人毛をわがうて舞

纏結則是ハ家玉云うさむこの於九層亭木蓮花
管長竿は後ハありて号をより

樂部則是時尚の樂ニ拍枝鞞得務樂軍中
舞管多し大平樂のくをより

珍美則是ハ大りさき善の物也今各産犀角
弓螺鈿を枝葉のたより也

散妝則是ハ家玉の散樂也云のこ一聖仙人山翫
藏小僧なり脛信ぶどの各なり

右よりいす一紙筆をも是つがゆの神社をくけり

あり和漢国異よ信あるれども人情を於ては亦面あり

よりありけり也

○ 塩尻巻力に十也

日迅

○ 禮曰大支燕食有膾之脯有脯之膾士不戴美敬

云

大支の祿重きも亦たよあゆ(食)次也(庶)人を

や古(乃)人其皆亦ある事也をそ知(後)世我人

物(乃)其蔽の戴(乃)の(乃)る(乃)も滋味を嗜(乃)て救(乃)挽(乃)の

饌(乃)其(乃)の事(乃)其(乃)忌(乃)憚(乃)る(乃)事(乃)其(乃)の(乃)ま(乃)き(乃)る(乃)り

ト(乃)に(乃)今(乃)暴(乃)家(乃)の人(乃)其(乃)食(乃)を(乃)其(乃)中(乃)に(乃)て(乃)善(乃)也(乃)を(乃)り(乃)

を(乃)其(乃)中(乃)に(乃)て(乃)其(乃)形(乃)を(乃)巧(乃)よ(乃)ま(乃)る(乃)を(乃)其(乃)中(乃)に(乃)て(乃)呼(乃)ぶ(乃)也(乃)

ありんや九を身は一縷を披三喰を食ふに滅防の
若衆女の昔を思念せよらんや是成て自肆ふ
る者ハ終ハ他の毀墮を更けらるるはと大威成をて
すふの是成をいふるべらんや

○鳳凰生而有仁義之意虎狼生而有貪戾之心兩者
不等以其母嗚呼戒之哉大成

○此男女婚禮を平しくして其始を結むるを
ソウ今世色小迷ひく行物を御此搖孔の中を
生さゆを其よめをいふに平めを子と青き
病入といふ

○心品昔川の嶽ハ敷山の子院ひきの山の
奥の院と云相應和尙の用

基中十觀音不動毘沙門の三尊像を彫て安座を
爰小滝を和尙の法の時飛泉の上へり大なる法
尾矣才之而是法心像法作以不動の感得
のちある一左明王院と号をともや矣發今又心音の
一と云

山川山江のり若月舎十有言小入者まら矣而すり
石い山の北の方
十里半のる程市行一百日云々して敷山の諸堂矣而を
毎らててねも其道七里入者十七日食して行を満
をけ北より淨鬼淨満として民を和別大峯の前鬼後鬼の

幸り也しる世拾人等を行して歳年らと作りしに丁酉
の冬香登上人建中其絶望りを再し真して元真
ちの考を動ふんをも公府に略し遺存の志作り
いしめて

享保三年戊戌三月十日平信のこゝ再興せしむ由
公命をりし同十二日香登上人状を以て余り
是を告

○仲冬初二愛智郡未成村小堀の里北城山の中西城壘
東南百間余南北七十間三重堀
爰天文年中藏田佐後平信秀築之て曰耶古後

の城より福しむとれし初中藩初門石原勝情記
享禄中名護屋の城を奪ひ天文十三年又古後
并けいしめて年々も高時威をゆるして今川
と戦ひ三原小大に駿を破り信長居據るありし初
成親の終よ山城へ乃道三女を以て信長小堀中
むむ小あま平ありし天文十八年三月三日申して
下せし。家督信長上総結く武蔵善悪ありし名臣
けいの城に金力ありし信長初回して并りしむ
信長中藩の新波城の城地ありし小堀より後には治二年
林信長は東田信長の城に信長をす

ことし佐長を殺さんと討たる小成剛がふりかへり
 鶴ヶ山は在田の效を中信の難攻して討取らるる
 とも功の年弘治三年二月信行終つ清海城に入りて害せ
 らしむると申す未だ城をかくて奈せやと申すと云ふと申すと云
 一百六十城を墟とすと云ふと云ふと申すと云ふと申すと云ふと申す
 一年に古井三三と云ふと申すと云ふと申すと云ふと申す
 嗚呼元熾星斗也。りりと云ふと云ふと申すと云ふと申すと云ふと申す
 ことぬ世のゆりごとくつりゆらまゆまと云ふと云ふと申すと云ふと申す
 白髪の恨を帯ふはれと感さく一絶を記す
 功名為昨槐安交 昭々山風不掃悲
 提叙授教轉何在 只看老樹落紅飛

海山の風景物餘哀里亭小佛の南の方排巖潭の
 小舎

ことしに遊ひ来りて遊ばしけ海邊家系山地を
 きて寺を立上り移り寺東の山は業師堂と
 排巖道見信秀松岳道悦信行の牌子回つものに
 るも哀れ之名今秀頭信秀と名取の法名ありし
 うやけの快翁後和尚用祖信秀の位を礼して改更す
 く木の葉より埋く曲徑さびし
 冬よりこれ地の霜霜よりしてとまふ信秀の姿は
 礼山のまじりて中信秀のまじりたる君成

る。重寶の成りしを皆非真のさめりて
其意のしつ耐てのりこころいひあげある元來
ん人さあさしりかへ神我まの古人もあま
謂さぶらりや連年の神道者唐土をばいりし
りしものいまは我まのものをばいりし
多きことむらうらふ我まの古人もあま
し生の忠心をいひま代々の名信のまもりし
戸を立ちし自新をばいりし我まの古人もあま
のまをばいりし我まの古人もあま
陽復記の心より世よりまもりし我まの古人もあま

惟是のつ人おしはふけやそく神乃ともせふ
こそ是は下初家の餘流にて山崎教美が一流の
神道を傳ひしを今更又まをばいりし我まの
若も初部もまもりし我まの古人もあま
あまの古人もあまの古人もあま
何れもあまの古人もあま

○或人今我のまもりし毎の界もあまの古人もあま
かぎりし我まのまもりし無のまもりし我まの古人もあま
あまの古人もあまの古人もあま
豊有無のまもりし我まの古人もあま

より無林を以て元と作せし秦の厚新の隷書小本を
覆して四點を以てしたためしりて無の字を作れりされ
諸の重絶秦火小焚後復すこれを書きしる者改字
の無を以て惟易の楚列小本とされし昔のまじり
元の字をす傳はるる字す小本とすけ字のまじり
うきとす

○或人云漢士家小八牧記法と云りりしゆ所を云円

光大師の一枚記法小重光上人傳の一枚を添は

後託主禪師後秦光明
おん山也文永六年八月九日の抄記良

曉師の正和二年二月十日の抄記惠師の康永二年

本言の抄記良明師の應永十年二月廿六日の抄記

師の永享五年十一月二日の抄記卷師の唐正二年

二月廿六日の抄記初を稱して八師を傳の法文と云是佐女

光師也一流のお兼りして元祖の教戒小遠はるる

一東常縁入道は相傳を受けて後小るる

たしとるあむらただのこの字を傳はるる

○は冬十願東郊氏地小諸家の把家と其趣うこのを

しり傳ふこと由 命倍長及高家寺の
把家等よりしる小信書物

の障目ハ二首の家作り作りをぞされハ太平の時冬

廿宅の外下屋裏と云りりて古本の書昔小信書

又此は農氏の地を買家作らるゝ或は毒を並或は石
を巧中して抱あつて此家と云ふ方多かるべし此言
の作。世の貴をすまひます。まを也天下これ後
以て其心を情はつて遊小をのるを信はし

○或人云仏像を彩畫せりは皮膠を用ひ信はるゝ
ある穢りき事と云ふ事ふらふむむと云ふ事か

陀羅尼集梵ノ彩也小熏陸香汁を用ひて皮膠を
用ひて信はるゝと云ふ事仁王念誦法にも香膠を以て
を信はるゝと云ふ事香膠ハ諸の草木の根汁粘着を以て
又石蒜ササヅミ 佐ササヅミ 芥子の油と信の具ふ事ササヅミ

と云ふ若音集の 小像造り今多皮膠を用ひて信はるゝ
うらゝを以てせは清浄なる也惠公等の古作ふにハ
つきの像也

○仏の小麝香を焚いじりぬめあり持貝実經ありん
たり九つり小神社のあり香枝焚るあり 性首我心に
あきこのあり唐古とて今この伽羅等の香木の造り
後世西よ信へる事と云ふ事也香草ありん
具概を去能あり神の忌まひのあり小の信はるゝ
今家奉祀祠香を焚きまひる事あり 如も信はるゝ
今光明燈の每天品の諸香の中は麝香信はるゝ

仏の小横由ハ下はるる也甲香又仏のやと
忌作多しものこ

○和光謙上人各日昂具之韻

呼我一声鶴 覺來寒夢醒

回頭遙嶺雪 眼霽白雲平

和竹龍王之韻

疎竹有聲孤枕靜 破窓鐘動夢回晨

朔風深冽發梅去 結凍更知時序頻

○或人問勅會御供養等の時貫首及堂の行列

さゆの各月ありと地行とよれはるる男高野の御供養の時の行列

ハ云

所守俗鑑取俗專當俗綱掌俗檢非違使女前

駈坊官俗三綱大法師律師等從後師十弟子

如意を具貫首執相殿上人執蓋殿上人上童兼出衆徒

中童子大童子大童子長即後官人俗力者扈從

官信大凡群行或官人の後履也

右名家家大槩は浄家大きに印して小吳
之知恩院之水大師の言奉の御忌 勅會の次

を以て見るとハあつたを

○或人問密教の十二天の次履の初は右ハ初川時二

- 六船座天
- 二月天
- 一火天
- 三多門天
- 比帝釈天
- 本堂右
- 本堂左
- 三伊舎那天
- 四月天
- 二日天
- 六水天
- 一林九天
- 六羅刹天

○神多ふに比辟不動明王を安置す千んう碑々矣昔
 昔又にお泉曼荼羅等の安置ありて一密傳を
 傳へしに於て右能考ん總て密教増上のる甚秘を
 他家の志しきりて

○神之日の比養濃を於てゆりし人内々々武能於矣
 國の天皇よまひりし山仰々岩尾をあはれ松を於て
 神さびらる社に樓門小卜るの牌を門の柱に供養院
 ちかきまに供養院

竹大門九を十八町中て六町ハ松もゝるの以て町ハ
 横たえいと四りたり又六町ハ楓樹を於て知事たふ
 屋をうゝるく日まのやあり 木の大き三田中殿
 多楓葉大小きて色まきかひり
 夕日ふりつちひて人の面ありく見の大老田のゆい

くまうきしはる者ゆいけはら後礎砌院勅して
 うゝるをのひもあひに傳へしゆりそをりし東遊
 き山の東郊のあふらふまゝく六區人のさもれへも
 作らんふひあひらふ名家に惜くも人自希めては
 貴秋のうゝるくことく実も知をさるあの中系
 色の指地をくまのあひら地をまふくおもはれたり

わしを又其師社に式月記の友社小のやけりん縁紀
ありきりまは

△社に殿尊も大ふ冬場別地ふき師具合の時車一
輛つらうけりしを△北の方十餘里の西

○惠心僧社の初は信く兼同一和語通去程を侍講

せされりしが 敷威の餘り本寺香炉及び師衣を

裾りしう古くあるものなり師衣を送りしを前に

これをもとに信く兼同の中心に恨られその文
の中

山のがせたまつりて後らけよふれまは

さハ心をこめていれどもまふ人なる

やうこそ思ひて大因の更なる友位小を

青のけあ香く夜の色をく君のひひより師純

講読一巾布後のあをとりあひらねの名聞利長

のひびきしきりそらふちを

さよふ今やうきりに樹下石上のふるまを食

に君をわくしてあをこりあををひろひひ

しは後世あふんきま

再ひさう出ま宮のまらうを友位階の

はあゝの如きはあうらまに出まをわうら名聞の

あしひこの法師とてしほと畧文

嗚呼賢哉小僧老婆かしてそ信取は世をいふ
るみ孫坊の欲得の志厚くして住生要集庫自他
を利きし下り妻世の信法師持つ難が教自道き
福ひく名を求め利を貪るりのけをの尻の筆の
わをえびうと面小汗をましてまめんやこれり難
愧の心ありんか貪欲のものをとり信取まし
より名利の人ありまは只孝の志より送れるものを
さへつれあつていそいそめぬは後人のあはれ
あきとる

今世日蓮堂つとてま家と行務の難き佛法
を勧めて他の檀越を引入ぬ人小術ひ道き是
世世ほいこのまのこのまのまのまのまのま
りいあや諸家の信とていふまをまてま衣
をまや一信取をまつた謀をたしまま利へ
酒也小私まこも信取のまのまのまのまのま
是を信信とていふまのまのまのまのまのま
あまやまのまのまのまのまのまのまのま

○昔崔玄暉の母其子を戒て曰兒子の友は信若
つらふはあつてま宛今會定のて存まのまのまのま

り是好消息の一は貨貨充足一なる睡肥之と云ふ
是惡消息と云へり後世の友の如く小富貴小徳し
非我の財を得る衣履京貨を以て其父母の徳れ
父母たる者但存此と云ふを却て意ふけいの徳も
よりゆたると不同大概非理のおを以て父母はま
つよと云ふまじくも自盜賊のまじりて親を養
つらまじりてつらむゆか也孝りして大死を共心
人何は愧ぢるべけんや程子曰順理則裕後欲惟廉
と世ふ人まじこれを含ひさるや心平儒仁を教ふ
ありとも惡女の妾方を以てま子を教ふ心は善

さて其女の非良痴愛をつまむゆり初る節を
して非の節のつらむ人の戒められ住の
夢中つら焼く古きを懐く涙流るる中ま思ひ
あつものこそまき政君の福を食て奉門の力を忘
れは主人を地下に恥のかん汝の福流るるつらむ
つらふは孫の承くがすくさすも筆章のつら
福ひく人の来地を時移りあつて他の有とありしを
えまをや汝存安のつらむを思ふは是君の地への安
逸をもうりてやま遊宴の場とせんやあつ福のこち
小諫のつらまを保ちて我がの影のし天敵を諷く

あかりの文草の願とありて我をこゝろのさたるふ世の
あふひの他のさるるしにあり侍の天下も又口一因
秦漢の改り三四 一疏して又のれ侍るもの
公平家の為泰原氏の威武北条叔父の弟も是利
將軍ふらり幾回羽撃のつぎ起れる故て飛ぶ孫
長く侍るに富且貴さるものありや於一世後初の
あつらひの志もあつて又むすぶつてさるる
なりさるるをさるるしに侍るふ名を延て十字街
双り走り夕小利をうきくは夜の鐘声ふり響く
ほしふるよきや

○花侍講禅蓮社良照圓觀養山 享保二丁酉十月十
三月七十歳にて迂化実よ蓮門の白眉と云ふも夫
下其学を知りてある

○鴨月十一日有早梅花

閑山隱々曙雲閑 右花慘々落葉堆

獨覺暗香有餘味 歲寒雪捏一枝梅

○こまうりし者の親の植ふ梅にて黒より紅こころ
ア十七年毎花咲比うこと電せりうけ冬いそいで
さきて初のはひのえかぬをえるかゝりしめさうて
花の中をそくきけり十月十日

久しかりや昔小師のくちを帯たが為とあき梅のむねハ

去年の久藤山の海脈霊源禪師後入府下の護国

林とまれ一干和尙のふじりありしからりて相と

白梅をわけてまいらせしうらふふさり微第と知平

祖師の意と示されし初ヨリ心事と春魁と

ぬきしもの交り禪師こころの育十八日

乃寂りる季秋收峯和尙の附法旭後南福禪

寺晋院のも 園東の命作りうらり浮世のす

りふとくれとうそふれりて

一同にたふまことの漢なる悉そそあきたる浮世

○五ノ冬まきあまうしつものやりもあまうしつもの

比末の人のつものしうう文とつて

々覚さそわぬ福よ色んせと和ふさある昔の相と

とらひとせけりるまらしとせとせと迎去まさい

をこし中一もあたまて

々名をたひし一歳のはんかんのひたつたふに

○明遍僧の志仏者の十樂性生をがふんす下の

るてつふやうい一実上の西方を慕ふ人をも補つ

まきふかりしあや今のせはりし知者も希ありしふ

近き比云律法師いふ十樂和船を述一師後の大人後

跋つらり様は後て摺子と命一展轉歌詠也子レテシむ是
より想を安きに送る人又多かる或人すめて十樂の
うに本を流中彼は仏國法樂の詞をきて冬
の歌

いふをいふけせ我のまのひあき峯の石の隈

○詞章の末をきて大小の字を外より俗儒より其
教小學の窮理の大學のまを存る大小を費り
天則をめて仁を求む是を捨て又何をうすむ
後一雜事読ハ市賢の字ふりしを美をこのと奇
を併名利の字して仁の目あるか放逸无慙小

して已う心よ合ふれは妄を由革て痛一措

○貞室内主紀氏卒卒吳忌辰社明慶讀九品曼荼
一鋪開題三部妙典一部就墓所建立輪塔持莊金
臺以作銘筆此曰

無尽貝葉 傳用曇華

滿天 白 絮矣金葩

塚をくりそをひつげ作りし歌

秋きこの 立かれし 中ふべり ひときと

ありし くのぬは 袖ぬれて 表夜子あ

高はふむ 月あがる 山のまよ かしらと

さうりあき 光りあけく ぬのさし せのひたれに
をろりあき 泪のあけく しのびたし 春のさし
あしたよ ちかひのさし 春のさし しのびたれに
花のえよ 心をとりて 春のさし しのびたれに
へそあき 昔の花の 春のさし しのびたれに
あふ川の 雲の昔の 春のさし しのびたれに
さうりあき 春のさし しのびたれに

けさの雲の三原のあけく 春のさし しのびたれに 伝阿

○瑞原のゆ歌をいつくまうじし 尾の春のさし しのびたれに

中よ

日光山にて

たれ強く 雨代の川の 雲のさし しのびたれに

夜

つらいつと 時めひまのさし しのびたれに

東より

清い波を 雲のさし しのびたれに

一夜とまる 春のさし しのびたれに

浮橋のあけく 春のさし しのびたれに

春のゆ歌の中よ

春のさし しのびたれに

毛後の花

智のまは花の色香まをうらむおてあはれ心

木曾路ありて

かきうらむまは白きの羽ゆりたまき木曾の枝

春日敷はまのいづれは神宮のまは神宮の床の松尾

述懐

うき世そこのかゝる世をまはりしはた迷ひの

民象を

じふと一信をまを業をまはれる候のうらむおてあはれ心

あゝわらわまのあはれ心

りまはたうらむまのあはれ心

世の半をうらむまのあはれ心

田家の秋

山田のまはりほの指むらうまのあはれ心

外山の養老をう

幾秋の菊の白露掃りてやむをまはり山田の井のあ

是等のほのうらむ堂上方のかどまはりやうらむ

○或人の三肉食を忘るまはり儒教の流りや

神の息を忌穢するのまはり曰儒教其齊の付肉を不

食等の礼はまはり儒教のまはりや

是法まきし沈みあがりてのまきし教わし合流し出せ
貸者ゆて是をたきよて約せし初めありてふ
を具はして神に射し氣を池に投ぎれりて希し沈
券を信をきし入りける社まのりりしとて勢ふ異世
のらましり人々毎日市のくま集りて神に論し合
かりんふめりて神もまたらりしはあん又か
振すましとて債をたしりてあそびまきんとしてま
呵呵せし時今世富を求むとて毎天を祭り稻を
を種者安彼ふまりりて申せし朱の所祇厄の邪法
傳へし物を祭るまきしとも傳れし何の餘流今も

絶世を人を邪路に惑はせしとて漢を唐とてとも
乃その邪術をわきまきしとていへり

語怪我中のあはれの体ゆり奇怪のくま多きまきり
徐植師の異材方鳳のあま考もまきしとていへり

○臘八生山の聖客を祀りて香をたてまつる

凍鬘當丰服石座 一星拈出耀瑤耳
現前無乾飛龍化 庾廓大虛乍噴雷

○昔日子玉食を見て慶然として曰非饑斯可あんや
と錦衣をきて類然として曰費寒斯可あんやと
華屋を見て慨然として曰非露斯可あんやと

慶應乙丑

為盛の家に在る御書はたまはしげと不致されしものなりと
らぬ中この御書の心を不致して根に腹の致を嗜
形虫の災を衝ひな舎の華をまるとまた人の心は
とと又及初の子は何そ泡沫の身を忘るや終に徳
昔書と消すすまらぬ。御書も徳の若くは人の心を
何ぞの執し何を二階しに白痴の程自ら思ひやりと
歳書のこと

東山くみまことぬ老の故に。まじりてやうま

信尾巻才に十に終

信尾巻

